

日常の「ヒーロー」

—ハインリヒ・ベルの『道化師の意見』について—

羽坂知恵

ハインリヒ・ベルは、小説『道化師の意見』(Ansichten eines Clowns*以下『道化師』と略す。)を1963年に発表した。その際、激しい論争が、この小説をめぐる展開された。というのも、ベルが自分の小説を用いて、カトリシズムや当時の政治、耽美主義を批判したのだ¹と、当時の世間は主に受け止めたからである。また Marcel Reich-Ranicki のように、これを「エロチックな物語」であるとした²批評家、そして『道化師』の主人公ハンスと『The Catcher in the Rye』³の主人公との間に、共通点を見出した⁴ Günter Blöcker のような批評家もいた。

だが、これらの批評はまだ十分とはいえない。なぜなら、それらはまだ大まかに、いうなればイデオロギー的に小説を解釈しただけのようにおもえるからだ。そこで私は今回、主としてハンスとその父親との関わりについて、その箇所が使われる単語の象徴的意味までを⁵検討し、作品解釈を行いたい。

さて、Bernd Balzer によれば、今日もはや解釈の主流は、作者と主人公を同一視していない⁶。なぜならこの小説は、内容のほとんどが主人公によって語られる一人称小説⁷であるか

* Böll, Heinrich: Ansichten eines Clowns. In: Werke, Romane und Erzählungen, Bd. 4, hrsg. von Bernd Balzer. Köln 1977, S. 67-266.

1. Schwarz, Wilhelm Johannes: Der Erzähler Heinrich Böll. Bern 1967, S. 62.

2. Reich-Ranicki, Marcel: Literatur der kleinen Schritte. München 1967, S. 15.

3. Jerome David Salinger: The Catcher in the Rye. Boston 1951

4. Blöcker, Günter: Der letzte Mensch. In: Der Schriftsteller Heinrich Böll. Ein biographisch-bibliographischer Abriss. München 1969, S. 74.

5. ちなみに主人公がディテールに鈍感な人々を批判する箇所が作中にある。:「僕のわずかな経験によれば、カトリック教徒たちにはディテールに対する感覚が、少しも無い。」(Werke, S. 114)「彼ら(帰国した亡命者たち)には、恐ろしい秘密は瑣末事にあることが、わかっていなかった。大きな事柄を後悔するのは、いとむたやすい。政治的誤謬、姦淫、殺人、反ユダヤ主義……しかし、誰が人間を許すのか、誰がディテールを理解しているのか。」(Werke S.215) これは、作中のカトリック教徒批判に単にとどまらず、『道化師』のディテールを理解しないだろう批評家達への、あてこすりかもしれない。

6. Balzer, Bernd: Heinrich Böll. Ansichten eines Clowns. Frankfurt a. M.

らだ。すなわち、第15章で主人公と対面する人物、およびわずか2、3言を交わす隣人のほかは、誰一人、主人公の前に(つまり読者の前に)直接登場することが無い⁸。つまりBalzer⁹のいうように、読者は、小説世界をただ主人公のビジョンを通じてのみ、体験できるのである。さらに主人公には現実と空想との区別がつけられない。したがってArpád Bernáth¹⁰もいうように、読者には、小説に描かれた世界が現実なのか、それともハンスの空想に過ぎないのか、判断しづらいはずなのである。つまり、ベルはハンスに対し、ある程度アイロニカルな見方をしているとすべきであろう。

しかし、作者は主人公を完全に突き放し、単に愚か者として描いているのでもなさそうだ。すなわちベルは、ハンスと距離を置きながらも、自分の考えを、ある程度ハンスの「見解」Ansichtenに反映させたのだ。ベルの見解が、ハンスのそれに近いと考えられるからこそ、発表当時『道化師』は物議をかましたのである。そしてReiner Poppe¹¹のいうように、Clown というものは伝統的に愚か者の側面を持つ一方で、賢者としての側面を持つモチーフでもある。すなわち、Clownは、社会における「常識的」な考えに束縛されず、独自の見解を持つことが可能なのである。

主人公ハンスは、職業道化師。彼の故郷は、旧西ドイツの首都、ボンである。ハンスの父親は億万長者であるほか、さまざまな肩書きを持っている。ところがハンスは、21歳でマリイと駆け落ちする。以来彼らは、同棲生活を送ってきた。だがある日、彼女は彼を捨て、カトリック教徒ツェップナーと結婚してしまう。

1988, S. 43.

7. Robert C. Conradによれば、ベルは、『道化師』を始め三人称で書き、後に一人称に書きなおしたようだ。つまり、ベルはこの小説を、意識的に一人称形式で書いた。なお、『道化師』以前にベルは、Marieを主人公として、非公開の小説「Augenblicke」を書いているそうである。Conrad, Robert C: Heinrich Böll. Boston 1981, S. 211.

8. 主人公は主に、電話を通じてしか他人と会話をしない。例外はコステルトだが、彼らはドア越しに話をするだけである。尚、コステルトは、主人公に出演料を渡したにもかかわらず、領収書を受け取った、という記述は無い。これはベルが、あくまで主人公を、その他の人物に会わせまいとしたからではないだろうか。

9. Balzer: a. a. O., S. 36.

10. Bernáth, Arpád: Zur Stellung des Romans »Gruppenbild mit Dame« in Bölls Werk. In: Die subversive Madonna. Hrsg. von Renate Matthaei. Köln 1975, S. 39.

尚、私の考えでは、ハンスの語りの内容そのものにも、信頼できない箇所がある。というのも、ある箇所ではハンスは、自分が現在27歳であるとしているにもかかわらず、別の箇所では、4年前まだ22になるかならずであったとも語るのである。もちろん、ベルが単に、27マイナス22を計算し間違えた可能性もあるが。

11. Poppe, Reiner (hrsg.): Ansichten eines Clowns. Zu den clownesken Elementen des Romans. Hollfeld 1999, S. 29.

全てがハンス個人のせいであると Lothar Ulsamers¹² のように述べることは、ストーリーを理解しているなら出来ないはずだ。なぜならハンスとマリーの関係が、ボンのカトリック・サークルによって壊されていくさまが、ハンスの回想という形で描かれるからである。くだんのサークルは、二人の人物、即ちゾンマーヴィルト司教およびキンケルによって、事実上支配されていた。マリーも含めたサークル構成員は皆、二人の唱えるいわゆる「秩序原理」**Ordnungsprinzipien** に、(ハンスによれば) 逆らうことが出来ない。ところがハンスは、始めから二人と仲たがいでいってしまう。その結果マリーは、カトリック・サークルの勧めに従い、彼のもとを去ることになるのである。

以上のことから『道化師』では **Ordnungsprinzipien** という言葉が、権力の象徴として使われていることが、容易に読み取れる。すなわち **Ordnungsprinzipien** という概念を利用して、影響力の強いものが、その他の者の「自由意志」を無理やりこしらえていく。だからハンスは、サークルの権力者達に電話で嫌がらせを言うことが、マリーを取り戻すのに有効であると信じている。

だが実は、小説『道化師』は、カトリズム批判だけでは終わらない。ここで作者に批判されているカトリズムの背後には、更に大きな権力が描かれている。その一つは、いうまでもなく国家権力¹³である。そもそもハンスとマリーが破局に至った直接の原因からして、ハンスが、教会よりも先に、国家に結婚を承認してもらわなくてはならないという制度に反対だったことである。また、国家の強い影響力は、カトリック教徒達ばかりか、全ての登場人物たちに及んでいる。言い換えれば、最終的には政治権力を掌握するものが、登場人物たちを操っているのである。

ところで『道化師』には、マリオネットを示唆するモチーフが度々登場する。Manfred Durzack¹⁴ のいうように、作者はマリオネットのモチーフを用いて、登場人物たちの無力さや無知を批判しているのあろう。またベルは、Heinz Ludwig Arnold のインタビューに対し、『道化師』のプロットは、そもそもテセウスのラビリンス神話であると、コメントしている。

12. Lothar Ulsamer: *Zeitgenössische deutsche Schriftsteller als Wegbereiter für Anarchismus und Gewalt*. Esslingen am Neckar 1987, S. 112.

13. Michael Butler によれば、『道化師』にはベルの国家権力批判が最も如実に現れている。Butler, Michael: *Ansichten eines Clowns: the Fool and the labyrinth*. In: *The Narrative Fiction of Heinrich Böll*. Hrsg. von Michael Butler. New York 1994, S. 134.

14. Durzack, Manfred: *Der deutsche Roman in der Gegenwart; Entwicklungsvoraussetzung u. Tendenzen*; Heinrich Böll, Günter Grass, Uwe Johnson, Christa Wolf. Stuttgart 1979, S. 120.

Bernd Balzer は、このコメントの一部を使って¹⁵、マリーを、ラビリンス神話の後日譚であるナクソス島のアリアドネにあてはめようとしている。しかし私の考えでは、もっと素直に作者の言葉を信用して良い。なぜなら、実際に、『道化師』の世界は、ラビリンスの状況に似ているからである。つまり、主人公は繰り返し「壁」Wand¹⁶の存在を感じるし、ラビリンスで迷った人々が、結局ミノタウロスの思いのままになるのと同じく、小説の登場人物たちも、何者かの支配を受けるのだ。

しかし、それならばこの小説においては、誰がミノタウロスにあたるのだろうか。その人物は、ハンス以外で唯一「糸」Faden につながれていない人物だ。ハンスによれば、ハンス自身とその人物以外の人々は、「人形のようにまぬけで、何千回も襟に手をやるくせに、自分達を苦しめている原因の糸を見つけることができない」*dumm wie alle Puppen, die sich tausendmal an den Kragen fassen und doch den Faden nicht entdecken, an dem sie zappeln*¹⁷ のである。その人物はしかも、億万長者であることにより、人々を物質的に支配し¹⁸、テレビ出演して、人々を強引に説得する¹⁹ことで、精神的にも人々に君臨している²⁰。

その人物とは、ハンスの父親である。彼こそが、小説中の支配構造のトップに立ち、カトリック教徒²¹を含む全ての登場人物達に影響力を行使できる、ミノタウロスの存在²²なのである。

そう考えると、マリーを取り戻す為のハンスの「戦い」とは、結局自分の父親との戦いへと、行きつく。だからこそベルは、ハンスの父親一人だけを、読者の前に直接登場させ、小説中もっとも長い章を、ハンスと共に作らせたのではないだろうか。

15. Balzer: a. a. O., S. 27.

16. Werke. S. 145, S. 204.

17. Werke. S. 204.

18. Werke. S. 156.

19. ハンスは父親に「抗いがたい魅力」*zwingende Charme* があるとしている。Werke. S. 177.

20. Werke. S. 203.

21. ハンスの父親は、「褐炭会社」*Braunkohlenfirma* を経営している。ところで *Braunkohle* という言葉は、「キャベツ」*Kohl* という言葉を内包している。そして、小説中のカトリック教徒は、「キャベツ」を食べることを強調されて描かれている。ベルは、二つの言葉、即ち *Braunkohle* と *Kohl* の結びつきを利用して、ハンスの父親とカトリック教徒たちの間接的な結びつきを示唆したかったのかもしれない。「父さん」*Vater* という言葉も同様である。ハンスはこの言葉を、以前は一度も使った事がない。しかし、彼の父親がハンスを訪ねてきた時、初めてこの呼び方をするのである。*Vater* とは、もちろん、カトリックの神父に対する呼称でもある。

22. 父親自身は、そのことに気付いていない。彼は自分自身も、与えられた役割を果たしているだけだと思っている。自分の力に対する父親の無自覚は、ミノタウロス自身も迷宮の囚われ人(牛?)だったことに由来するのではないだろうか。

ところで、ハンスは、自分の父親を「半分人間的な搾取者」*ein halbwegs humaner Ausbeuter*²³ であると、みなしている。また、自分の姉が戦死して以来、ハンスは両親を親とはみなしていない。加えて、彼の理想の家族像に、父親の姿は欠けている(父親は、愛人のもとにいてのことになっている。)つまり父親とハンスとのつながりは、金銭に関することのみである。ハンスがわざと舞台で転び、金銭的に困窮した上でボンへ帰郷した理由は、それではじめて納得がいく。(単にボンへ帰るためだけなら、ハンスはごくまともに興行ツアーを打ちきるだけで良かったはずだ。)なぜなら、その結果、自分の息子の窮状を知った父親が、ハンスの自宅へと訪ね、ハンスと対決するはめになるからである。そしてハンスは、マリーに手紙で告知したように「一種の精神的戦い」を始めるのである。

僕父は、雰囲気を必要とする人間なのだ。そしてこの部屋の
雰囲気のせい、彼は神経をとがらせ、無口になっていた。²⁴

既に父子の対面シーンの出だしから、ハンスの父親は、困惑させられている。彼は、ハンスの部屋の無秩序さが、気に入らないのである。先ほども述べたが、「秩序」原理 *Ordnungsprinzipien* があるからこそ、父親は作品世界に君臨できるのである。

ところでハンスの父親が、自分の息子に金銭的援助を申し出るのは、息子のためではなく、「道化」という職業が、世間的秩序から逸脱しているため、父親にとって目障りだからであろう。(なぜなら、父親の金銭的援助には、あくまで「俳優になること」という条件がついているから。)ハンスは、父親の申し出を拒絶する。即ち、父親の君臨する世界に組み込まれることを拒むのである。

ハンスの姉ヘンリエッテは、「無」*Nichts*²⁵ という感覚を味わうことで、「秩序」に支配され硬直した世界から、逃げ出していた。ハンスも眠っているとき「無」*Nichts* を感じる²⁶ ことができるし、からっぽの目をパントマイムですることでもある。(父子の対面では、この目の表情も、

23. Werke. S. 150. ベルは、一つの物事について、その相反する二つの側面を描く傾向があるようだ。例えばすでに述べたことだが、『道化師』の Clown にしても、その愚者としての側面、賢者としての側面を、二つとも描いている。故に「人間的」*humanen* という言葉は、「人間のような」という意味にもとれる。(ミノタウロスは、言うまでもなく半人半牛である。)

24. Werke. S. 180.

25. Michael Butler は、ヘンリエッテの「無」*Nichts* を、「母親の残酷な偏見からの、夢見がちな距離と解釈している。Butler: a. a. O., S. 137.

26. Werke. S. 145. ハンスはこのとき「壁に頭を突っ込んで」ようにも感じると述べる。この「壁」という言葉が「ラビリンスの壁」という意味を含んでいるのなら、彼はラビリンスを超越しようとしているのではないだろうか。

父親を動揺させる。)そしてハンスとヘンリエッテ以外では、子供達が「無」Nichts²⁷を体得しているようだ。それが可能なのは、子供達がまだ、**Ordnungsprinzipien**を学んでいない²⁸からである。大人にとって「常識」である**Ordnungsprinzipien**は、『道化師』中の子供達には、通用しない。それで、大人の硬直した世界は、子供によって、混乱させられる²⁹のである。子供自身は、自分の影響力に無自覚なのだが。

つまり、「無」Nichtsとは、»**Ordnungsprinzipien**«に支配されていない人間の、思考状態なのである。ハンスは、「無」Nichtsを体得することによって、子供と同じように³⁰、父親の支配する大人社会に対抗する武器を、手に入れているのではないだろうか。

さて父子の対面に話を戻すが、ハンスは自分の「あくび」³¹や「食物」³²によって、自分の父親を苦しめることになる。つまり、ハンスの食事そのものが、父親に吐き気をもよおさせるほか、実際に食されなかった「りんご」という食物ですら、ここでは父親への攻撃道具となるようだ。

ハンスは父親の面前でりんごという言葉を二度口にする。最初は、父親が彼に、たんぱく質以外のものを食べるよう注意した時である。そのときハンスは、「後でりんごを食べる」と父親に答える。しかし「りんご」は単にたんぱく質以外の食物の一例として登場したのではなさそうだ。というのも、ハンスの女友達であるモニカがハンスの家に持ってきた食料の中には、りんごは含まれていないばかりか、彼の家は彼が帰宅するまで少なくとも三ヶ月は無人状態であったとされているからだ。しかも、実際にハンスが「後で」食べるのは、りんごではなく、バターつきパンと豆なのである。そしてりんごは、この小説の他の場所でも重要な役割を果たしていると考えられる。

デザートにはりんごが出た。その時になってようやく僕は母に、ヘンリエッテは学校の

27. Werke. S. 158. ちなみに、ここに **Schulmappe** という言葉が使われている。これはもちろん「学校鞆」とどのが普通だが、「(ラビンスの)地図」という意味を、作者がこめた可能性もあるのではないだろうか。

28. Werke. S. 144.

29. 例えばキンケルの子供は、両親の嘘を容認しない。またカールの子供達が、カールの答案用紙にワインをこぼしたので、学校で「勤勉」を説く際、カールはばつの悪い思いをしなくてはならない。

30. Poppe が、道化と子供は、社会的な精神の束縛から自由であると述べている。Poppe: a. a. O., S. 42.

31. Werke. S. 184.

32. 川崎祐人氏によれば、ベル文学において食物は意味深長なモチーフである。

川崎裕人、『ハインリヒ・ベル 原初への回帰—女性と共同体を中心に—(1)』(『独仏文学研究第12号』岡山大学文学部、1992年、196ページ)

遠足でどこに行ったのかと訊いた。母は少し笑って言った。「遠足だなんて。馬鹿ね。あの子はボンに行ったのよ。高射砲部隊に志願しにね。りんごの皮をそんなに厚く剥くんじじゃないよ。坊や、見ときなさい。」母は、本当にりんごの皮を僕の皿から取って、それをぐるりと削ぎ取り、自分の節約の証拠たる薄っぺらなりんごの切れ端を口に押し込んだ。³³

上の引用は、ハンスの姉ヘンリエッテが高射砲陣地に送られた夜を、ハンスが回想した箇所である。この日、ハンスの母親は、「聖なるドイツの国土」を守るために戦場へ赴かせた。ヘンリエッテはその結果として死ぬことになる。母親の夫は褐炭会社の社長であり、彼女は夫の金で生活している。彼女は自分の金銭的利益を守るために、自分の娘を死に追いやったといえるであろう。また、同じ晩にハンスは、母親のむいたりんごのことを、「忌々しいりんごの皮」*die verfluchten Apfelschalen* とよんで強調している。

僕は不安だった。その理由までわかっていたが、それを言い表すのはどうせ無理だったろう。そして僕は、あの忌々しいりんごの皮のことを考えると、カッと化した。僕は庭の、泥まみれの雪に覆われたドイツの土に目をやった。ライン河へと、しだれ柳の木々を透かして、ジーベンゲビルゲの山並みへと。そして、この眺めはすべて愚かしく見えた。

34

もちろん、*verflucht* という言葉は、「忌々しい」という意味にも取れるが、また「呪われた」という意味も持っている。このような状況をまとめると、グリム兄弟の童話、「白雪姫」³⁵ とよく似ていることがわかるだろう。まず、「りんご」に関しては、もはや説明は不要であろうが、他にも例えば「泥まみれの雪」という言葉は、白雪姫になぞらえられた³⁶ヘンリエッテの、不幸を暗示しているのではないか。また、ジーベンゲビルゲ *Siebengebirge* は、童話の中で姫が七つの山 *sieben Berge* の向こうで、七人の小人と暮らしていることを連想させる。この後ハンス

33. *Wekre*. S. 79.

34. *Werke*. S. 80.

35. *Brüder Grimm: Kinder und Hausmärchen. Ges. durch d. Brüder Grimm-der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder-Grimm-Museums Kassel. 1986, Band 1, S. 238-250.* この版では、まだ、白雪姫の母親は、実母である。

36. ヘンリエッテが口に出せば、「くそ」という言葉さえ、「雪のように」響いた、という記述もある。*Werke*. S. 86.

は自分の椅子に対して、怒りをぶつける。

僕はベッドの前に置いてある椅子を蹴飛ばした。けれども椅子は倒れなかったので、もう一度蹴飛ばした。とうとう椅子はひっくり返り、僕のナイトテーブル³⁷のガラス板を粉々にした。³⁸

壊れやすいガラスが碎けること自体に無理はない。しかし、グリム童話の中で、白雪姫がガラスの棺に横たわっている、とされた為に、ベルはここでハンスにガラス³⁹板を破壊させたのだ、とも考えられる。白雪姫は、ガラスの棺に仮死状態で助けを待っていた。だが、『道化師』では、ガラスは既に壊されてしまったのである。これは、ヘンリエッテが救われる可能性のものはや無くなった事を暗示しているのではないだろうか。事実彼女は二度と再び帰っては来ない。

40

りんごという言葉は、他にもまだ使われている。例えばハンスの母親は時折「幸福な家族」を演じてみたくなり、自ら「りんごの花のお茶」を入れようとする。しかし、彼女の子供たち(ハンスと、彼の弟のレオ)は、ヘンリエッテのことを思い出し、母親を拒むのである。そして、彼女が誰も来ない地下室で独り密かに⁴¹むさぼるの⁴²は、「アップルジャムつきのハム」である。

ヘンリエッテが戦地へ行かされたとき、ハンスの父親は何も言わなかった。したがって、

37. 「ナイトテーブル」Nachtisch は、りんごのデザート Nachtisch との言葉遊びかもしれない。

38. Werke, S. 80.

39. ガラスのモチーフは、このほかの箇所にも、「狩」Jagd という言葉と組み合わせて使われている。(グリム童話の中で「狩人」が果たす役割の大きさについては、周知の通りである。):「僕達の巨大な居間の中で起きたことには全て、幅広いカシの木棚の上のお祖父さんの狩のトロフィーと、蓋つきジョッキと、どっしりした、鉛ガラスのはまった本棚とがその場に居合わせたのだった。」(Werke, S. 81)『狩にだって？僕はまた、カトリックの聖職者は狩への参加を禁じられているとばかり思ってたよ。』苦しい沈黙が訪れた。マリーは赤くなった。キンケルは背々して部屋の中を早足で歩き、栓抜きを探し回っていた。ちょうど入ってきていた彼の妻は、塩味のアーモンドをオリーブの載っているガラス皿に注ぎ空けた。」Werke, S. 130.

40. 彼女の死は、家族には口頭で伝えられるのみであり、実際に彼女が死んだかどうかははっきりしない。この死の曖昧さも、グリム童話の白雪姫との共通点である。

41. グリム童話の女王が、毒りんごを作るのも、誰も来ない部屋である

42. この作品の中にはまた、「肝臓」Leber という食物も度々登場するが、とりわけハンスの母親の「肝斑」Leberfleck は、ベルの言葉遊びであろう。すなわち、白雪姫の「肝臓と肺臓」を食べたつもの、姫の母親に引っ掛けているのである。ところで「未来のマリー」がハンスの空想の中で、いらいらしながら食べるのも、「レバーソーセージ」Leberwurst である。これは、ハンスが、「未来のマリー」を自分の母親と重ねてみているからではないだろうか。(ハンスは、マリーが現在「姦淫の」罪を犯しているとおもっている。)そして「未来のマリー」の子供は、「雪のように白い」枕の上で眠ることになっている。

娘の死については、彼にもその責任の一端があるはずだ。ハンスは、ヘンリエッテの名を出すことを父親が恐れている、と考えている。確かにハンスは、その名を直接口にはしなかったが、ヘンリエッテをなぞらえた⁴³白雪姫を示唆する「りんご」という言葉でもって、間接的に父親を攻撃しているのではないだろうか。果たしてハンスが二度目にその言葉を口にした際、(このときハンスは、子供時代にろくな食べ物を得られなかったと父親を非難している。)、父親は泣き出し、彼が最初は軽蔑していた「冷蔵庫で冷やされた」コニャック⁴⁴を、動揺のあまり、よりにもよって「ガラスのコップ」で飲んでしまうのである。ここで示されているのは、父親の権威の失墜であろう。

だが父親の動揺は、ハンスの完全勝利を意味するのだろうか。実はこの父親は、そう簡単に降参するような男ではなかったのだ。4杯目のコニャックを飲み干すと彼は、いそいそと帰り支度をはじめた。息子に金を与えずに、というも、彼は金について話すことは、現在自分が「少しばかり楽しんでいる」「悲劇」の、「高貴な苦悩というレベル」にふさわしくないと考えるからだ。そして、父親は、「ずるそうににやっと笑って」立ち去る。結局ハンスは、父親から金をもらうことも、隠れた権力者・権威の象徴ミノタウロスとしての彼のありようを変えることもできない。ハンスは街頭のギター弾きに成り果てるのである。

H. J. Bernhard は『道化師』にベルのポジティブな姿勢を見出すことができなかった為、ベルが精神的危機をむかえたのだとしている⁴⁵。しかし私はこの意見には賛成できない。なぜなら、一つには Bernd Balzer のいうように⁴⁶、ハンスは小説の初めから、既に「没落」⁴⁷を望んでいるからである。

しかも、ハンスは希望を捨てていない。すなわち、自分が街頭のギター弾きになれば、

43. ハンスにとって、「白雪姫」とは、ミノタウロスによって破壊される、「一秒か二秒しか続かない幸福」の象徴でもあるかもしれない。なぜなら、ハンスとマリーが初めて一夜を共にした翌朝、白雪姫をおもわせるような「赤い頬に黒髪」の若い少女が、幸せに浸るハンスの前に、現れるからである。また、このとき「僕は(ボンボングラスの)蓋を開けた」*jich machte das Glas auf* という表現も、共に使われる。いうまでもなく、白雪姫が救われるとき、ガラスの蓋は開いたはずである。

44. 自分の所有物全てが「最高」best でなくては気が済まないハンスの父親は、一度冷やされたコニャックは、もはや best ではない、として初め馬鹿にするわけである。ちなみに、最初彼は、ミネラルウォーターを「もっとも安全な飲み物」*die sicherste Getränke* として選択するのだが、ハンスの用意したその他の飲み物には、毒でも入っているような言い方ではないか。

45. Bernhard, Hans Joachim: *Geschichte aus der »Provinz«*. In: Schriftsteller Heinrich Böll. Hrsg. von Werner Lengning. München 1969, S. 90-98.

46. Balzer: a. a. O., S. 53.

47. Werke. S. 69.

Marie が「慈悲の心」*Barmherzigkeit*⁴⁸ をおこして、自分のもとへ帰ってくる可能性がある
と、ハンスは 思っているのである。

そう *Barmherzigkeit*こそ、ハンスが周囲の人間に求めていることなのである。彼は
Barmherzigkeit を、「人間らしさ」であると考えているのだ。⁴⁹ ハンスは度々、周囲の人間
を動物にたとえる。それは彼が、人々は *Barmherzigkeit* を失っていることで、「人間らしさ」
をも失っているとおもっているからではないだろうか。そして半人半獣からの人々のメタモ
ルフォースが、ハンスの、かつベルの願いだったのではないだろうか。それは半人半牛のミノ
タウロスからの解放を意味するからである。ちなみに、この小説中でハンスに
Barmherzigkeit を示すのは、彼の友人ザビーネ・エーモンズである。また、ハンスが最
後に通行人からもらった小銭も、通行人の *Barmherzigkeit* のあらわれとみなす事ができ
る。

またハンスは、芸術の種類に貴賤を設けることについて以前から疑問を感じていた。だが
彼は街頭のギター弾きになることによって、「芸術のレベル分け」からの、自らの解放を成し遂
げている。

このようにハンスは、彼の父親、即ちミノタウロスに部分的には勝ったわけである。そしてミ
ノタウロスとの戦いは、マリーが発端である。つまり彼女はハンスを（無意識とはいえ）間接的に
導いたことになる。彼女はアリアドネ役を演じたことになるのである。したがって小説中でハンス
が「自らの意思でしっかりと握り締めている糸」とはマリオネットの糸というよりはむしろ、アリア
ドネの糸を意味すると思われる。（マリオネットは自分で糸を握ったりはしないから。）その糸の
助けによって、ハンスは精神の自由を勝ち取るために、ミノタウロスと戦ったのである。そしてミ
ノタウロスは、現実離れた妖怪などではなく、ハンス自身の父親だった。また、ハンスが戦い
の際、武器としたのは、日常におけるありふれた言葉であった。道化師ハンスは、役立たずの
愚者であると同時に、神話の英雄テセウスのな、日常におけるヒーローでもあるのである。

48. ベル文学における *Barmherzigkeit* という言葉は、しばしばマリア信仰と結びついている。
『道化師』に関しても、*Barmherzigkeit* に関連した部分が、他にもある。ヘンリエッテは明らかに
barmherzig な存在として描かれているが、高射砲陣地へ向かった時、彼女は（普段決してかぶらない
帽子のせいで）*junge Frau* のように見えた、という記述が本文の79ページにある。*junge Frau*
という言葉は、「若い女性」を意味するだけでなく、マリア信仰におけるマリアのことも指すのではないだろう
か。また、ハンスの留守宅に、モニカが立てていったろうそく（無人の家に、普通火のついたろうそくを置い
ていくだろうか？）も、教会内の灯明を暗示する可能性がある。

49. Werke. S. 140.

Der >Held< im Alltag

-Zu Heinrich Bölls »Ansichten eines Clowns«

HASAKA Chie

In dieser Arbeit habe ich Bölls Roman »Ansichten eines Clowns« interpretiert. Bei meiner Untersuchung habe ich den Details im Text besondere Aufmerksamkeit gewidmet, weil ich glaube, daß das Werk nicht nur politische Propaganda ist, sondern auch ein Roman, in dem der Autor auf wichtige Kleinigkeiten achtet.

Dabei setze ich voraus, daß Böll seinen Helden benutzt, um seine eigenen Gedanken zum Ausdruck zu bringen, obwohl er von ihm Abstand nimmt und ihn etwas ironisiert.

Böll beschreibt die Macht der »Ordnungsprinzipien«, die ein Liebespaar (Hans und Marie) nach und nach zerrißt. In diesem Roman sind die »Ordnungsprinzipien« ein Symbol für die Macht der einflußreichen Männer. Sie bilden die »Freiwillen« der anderen. Im Hintergrund steht die Politik, und der Vater des Helden verfügt über die eigentliche Quelle der Macht, obwohl er selbst es nicht bemerkt.

Böll selbst hat darauf hingewiesen, daß der Plot dieses Romans der Theseus-Labyrinth-Mythos ist. In diesem Zusammenhang stellt sich uns der Vater von Hans als Minotaurus, Marie als Ariadne und Hans als Theseus dar.

Hans nimmt gegen seinen Vater den Kampf auf. Wenn man seine Aufmerksamkeit auf die Kleinigkeiten des Texts richtet,

kann man bemerken, daß der Held nur alltägliche Dinge oder Wörter als seine geistigen Waffen benutzt. Er kann in der Folge seinen Vater zwar nicht bezwingen, aber er kann einige Male die Freiheit des Geistes und die Menschlichkeit seines Umkreises gewinnen. Daher endet der Kampf, der durchaus im Alltag geschieht, zum Teil mit seinem Sieg.